

## C. 研究結果

### 1) AED 使用事例

各社新聞報道記事やインターネットでの検索により、病院外での AED 使用事例を検索した。2004 年 7 月に市民への AED 使用許可以降で、23 事例を確認することができ（資料 1）、そのうち 11 例は具体的な経緯記事も入手できた（資料 2）。これら事例の実施者について検討すると、たまたま現場に居合わせた医師、歯科医師、救急救命士が使用した事例が 7 例、駅員やスポーツクラブのインストラクター、学校の養護教員、警備員など施設の一定頻度者に当たる職員が使用した事例が 12 例、医学生や救急救命士を目指す学生が使用した事例が 2 例、不明 1 例であり、通りがかりの市民が使用したのは 1 例のみであった。

さらに特徴的な共通点は、メディア記事として公開されるだけあって、全事例が心肺蘇生成功例であり、人命救助の表彰を受けていることである。また、報道された時期が、事例発生から長期間が経過していることも、共通する特徴であった。

### 2) 「こころのケア」実施事例

傷病者は市民マラソンの参加者である。AED 実施者は、この行事のサポートに参加したボランティア団体「いのちの輪」のメンバー 2 名である。傷病者は、市民の bystander CPR から救急隊に引き継がれ、搬送先の救急病院で救急治療を受けたが救命できなかった。AED 実施者 2 名には、直後から精神心理的ダメージと思われる心理反応が認められたため、臨床心理士によるデブリーフィングが 1 週間後に行われた（資料 3、資料 4）。

デブリーフィングの有効性を示す関係者からの手記が、担当医師らに寄せられたので資料として記録した（資料 5）。

なお、八戸地区では、最近の 2 年間で市民による CPR 実施は 8 事例が把握されていて、心拍再開は 1 事例、除細動実施が 1 例であったと報告された（資料 6）。

### 3) AED 実施関係者の手記

愛地球博（2005 年）では、5 件の AED 実施事例があり、4 事例で救命された。東京マラソン（2007

年）でも AED 実施が 1 事例あり救命された。これらに関わった関係者から当時の心情を綴った手記をえた。前者では AED 被使用者（資料 7）、後者では AED 使用者（資料 8）ので、直接関与した人達への心理的な影響を知る貴重な情報と判断し取り上げた。また、愛地球博では、AED の被使用者から体験記録を得るためのアンケート調査が行われたが、その際に用いられたアンケート内容も今後の参考資料として取り上げた（資料 9）。

## D. 考察

この研究で明らかになったことは、市民による AED 使用事例（PAD 事例）として把握できた 23 事例では、大多数が業務時間外の医師や救急救命士などの医療従事者、またはそれを目指している学生か、AED 設置施設の職員（いわゆる一定頻度度者）によるものであった。そして、たまたま居合わせた市民だけで使用した事例は 1 例のみであった。この事実は、「市民による AED 使用事例」という言葉から受けるイメージとは、かなりかけ離れた状況であり、いわゆる非医療従事者である市民に対する AED 教育効果や普及効果を、声高に賞賛することは妥当でなく、むしろ時期尚早であることを物語っている。

最近、市民に対する AED 講習は急速に増加しており、AED 設置台数も急増していることから、今後は市民だけの AED 使用事例が増加する可能性が高く、心のケアの必要性も高まるものと考えられる。

心肺蘇生成功事例は、マスメディアに取り上げられる事が多く、情報も入手しやすい。また蘇生の成功によって達成感を感じ、人命救助の表彰等もあることから、全例に心のケアが必要とは限らない。今後、精神心理的影響の現状についてアンケート調査や個別面談などで調べる必要がある。

これに対して、心肺蘇生不成功事例は報道されることがなく、場合によって積極的に情報の拡散が抑制されている可能性も否定できない。しかし、心のケアは、不正成功事例の AED 実施

者にこそ必要であると考えられ、不成功事例の迅速な把握体制の構築、過去の事例の掘り起こしなどが求められる。

今回、当研究班に報告された不成功事例の当事者は心的外傷を負ったが、たまたま、「いのちの輪」というボランティア団体に属していたこと、1週間後に専門的な心理的なケア（デブリーフィング）を受けることができたこと、などが支えとなり、日常生活には何ら障害を残さず軽快した。この事例は、心理的なケアが行われた第1例でこと以上に、本研究が今後進むべき方向を明確に示しており、非常に貴重である。

もし、AED設置者やAED実施者が、「個人情報保護」の名のもとにAED実施の事実を非公開とするとAED実施者に生じた心的外傷の存在も伏せられる可能性が危惧される。AED実施は、「隣人の命を助ける」と言う極めて人道的、普遍的、かつ公共的な性質を持っており、その設置や使用事実は、個人情報に十分配慮した専門的な組織によって常時、把握されているべきであると考えられる。今回のAED使用事例の報告では、専門家による迅速な対応が効果的であり、周囲の支えの必要性が示された。

今後は、AED使用事例の迅速な集約化と、必要に応じて迅速に「専門家チームによる心のケア」が行える体制の整備が望まれる。

## E. 結論

市民によるAED使用事例は、信頼性の高い専門的なシステムを通じて迅速に把握し、精神科医や臨床心理士など専門家による心のケアが行えるシステムの構築が必要である。

## F. 健康危険情報

なし

## G. 研究発表

なし

## H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

## 報道された市民が AED を使用した (PAD) 事例リスト

1、医師、看護師、歯科医師、救急救命士など医療従事者であっても、非番で現場に居合わせ実施した事例は PAD と見做した。

2、番号、記載形式は、それぞれ下記を意味する。

事例番号 発生年月日 イベント等

①傷病者、 ②発生場所、 ③AED 実施者

3、報道された PAD 事例リスト (

1) 2005 年 2 月 泉州国際市民マラソン

①傷病者：77 歳男性

②心肺停止の場所：路上 (マラソン中)

③バイスタンダー：後続のランナーたち

2) 2005 年 6 月 愛地球博覧会

①傷病者：41 歳男性

②心肺停止の場所：パビリオンの前の路上

③バイスタンダー：医学部学生、警備隊員

3) 2005 年 8 月 関西国際空港

①傷病者：33 歳男性

②心肺停止の場所：出発ロビー (出国手続き)

③バイスタンダー：医師 (偶然居合わせた)、防災部員

4) 2005 年 9 月 明石市内 スポーツクラブ

①傷病者：69 歳女性

②心肺停止の場所：プールの中 (トレーニング中)

③バイスタンダー：

5) 2005 年 10 月 熊本県 ながみねファミリーYMCA

①傷病者：67 歳女性

②心肺停止の場所：プールの中 (レッスン中)

③バイスタンダー：インストラクター

6) 2005 年 11 月 昭和大学歯科病院

①患者：85 歳女性。

②心肺停止の場所：病院前の路上

③バイスタンダー：歯科医師 (通りがかり)

- 7) 2005年 11月 徳島市  
①傷病者：高校生  
②心肺停止の場所：教室  
③バイスタンダー：養護教諭
- 8) 2006年 3月 都営大江戸線 都庁前駅  
①傷病者：65歳男性  
②心肺停止の場所：エスカレーター付近  
③バイスタンダー：駅員4名
- 9) 2006年 3月 横浜市内スポーツクラブ  
①傷病者：73歳女性  
②心肺停止の場所：プールの中（トレーニング中）  
③バイスタンダー：スタッフ3名
- 10) 2006年 6月 横浜市内スポーツクラブ  
①傷病者：36歳男性  
②心肺停止の場所：ランニングマシン（トレーニング中）  
③バイスタンダー：スタッフ3名
- 11) 2006年 6月 東急電鉄 東横線 渋谷駅  
①傷病者：40歳代女性  
②心肺停止の場所：ホームで具合が悪くなり駅事務室に移動した時に心肺停止  
③バイスタンダー：駅員4名
- 12) 2006年 6月 山口市内体育館  
①傷病者：25歳男性  
②心肺停止の場所：体育館（スカッシュ中）  
③バイスタンダー：職員2名
- 13) 2006年 8月 京王電鉄 井の頭線 吉祥寺駅  
①傷病者：40歳代男性  
②心肺停止の場所：ホーム上  
③バイスタンダー：医師（側に居合わせた）、駅員
- 14) 2006年 9月 都営三田線 千石駅  
①傷病者：70歳代女性  
②心肺停止の場所：改札口付近  
③バイスタンダー：駅員

- 15) 2006年 9月 さいたま市内運動公園
- ①傷病者：26歳男性
  - ②心肺停止の場所：サッカーの試合開始直後
  - ③バイスタンダー：医師（チームメイト）、他のチームメイト
- 16) 2006年 10月 中部国際空港
- ①傷病者：75歳男性（米国在住フィリピン人）
  - ②心肺停止の場所：国際線乗り継ぎ保安検査場付近の通路
  - ③バイスタンダー：空港警備員
- 17) 2006年 10月 シティマラソン福岡
- ①傷病者：56歳男性
  - ②心肺停止の場所：路上（レース中）
  - ③バイスタンダー：医師（レース参加中）、警備を担当していた警察官、大会スタッフとして参加していた救急救命士
- 18) 2006年 10月 天白スポーツセンター
- ①傷病者：女性
  - ②心肺停止の場所：プールの中
  - ③バイスタンダー：スポーツセンタースタッフ
- 19) 2006年 12月 苗場プリンスホテル
- ①傷病者：67歳マレーシア人
  - ②心肺停止の場所：ホテル内（宿泊中）
  - ③バイスタンダー：消防職員（宿泊中）、ホテル従業員
- 20) 2007年 1月 仙台市営地下鉄 長町南駅
- ①傷病者：40歳代男性
  - ②心肺停止の場所：駅構内
  - ③バイスタンダー：医師（居合わせた）、駅員
- 21) 2007年 1月 高槻市ザバススポーツクラブ
- ①傷病者：女性
  - ②心肺停止の場所：プールの中
  - ③バイスタンダー：スポーツセンタースタッフ
- 22) 2007年 2月 東京マラソン
- ①傷病者：58歳男性
  - ②心肺停止の場所：マラソンコース 38Km 地点の路上（レース中）
  - ③バイスタンダー：救急救命士を目指す学生ボランティア
- 23) 2007年 2月 JR 東京駅
- ①傷病者：男性
  - ②心肺停止の場所：駅構内連絡通路
  - ③バイスタンダー：駅員

## PAD事例にかかわる報道内容

- ・新聞記事，ウェブ記事等で把握され得たPAD事例の経過を報道内容から抜粋した。

事例1) 2005年2月 泉州国際市民マラソン

- ①傷病者：77歳男性
- ②心肺停止の場所：路上（マラソン中）
- ③バイスタンダー：後続のランナーたち

## 【変えたい医療】突然の心停止生死分ける6分

### 医療者につなぐ救命の連鎖市民が講習

病院外で突然心臓が止まった人の命を確実に救うには、市民と医療者が「救命の連鎖」をつないでいかなければならない。救命技術を学ぶ講習が、医師だけでなく市民も対象に行われるようになってきたが、課題も多い。(鈴木 敦秋)

「スタートから1キロ。体調がよく、3時間50分の自己ベストを更新するペースでした。突然、意識が飛んで、気付いたら病院のベッドに……」

今年2月、大阪府で開かれた「泉州国際市民マラソン」に出場した府内の男性(71)が、その時の様子を振り返る。路上に倒れ込み、心停止に陥ったが、後続のランナーたちが「自動体外式除細動器」を使って救命した。「彼らの関係プレーと除細動器がなかったら、私は生きておりません。もっと普及させてほしいですね」

(2005年4月27日 読売新聞)



除細動器を使った救急講習を受ける参加者ら（東京・千代田区の東京救急協会で）

## 事例2) 2005年6月 愛地球博覧会

- ①傷病者：41歳男性
- ②心肺停止の場所：パビリオンの前の路上
- ③バイスタンダー：医学部学生、警備隊員



• 公立大学法人 横浜市立大学  
YOKOHAMA CITY UNIVERSITY

### 愛・地球博で本学医学部学生が人命救助

6月1日の午前中、現在開催されている、「愛・地球博」の会場でパビリオンの入館待ちをしていた男性が心臓発作を起し意識不明となりました。その時、その場にたまたま居合わせた本学医学部6年生の北原さん、国分さん、小竹さん、小西さんが会場備え付けのAED（自動対外式除細動機）を使用して応急処置し、止まった心臓を電気ショックで蘇生させたのです。

医学部ではACLS（Advanced Cardiovascular Life Support）勉強会を行っており、実際の救急現場を意識したシミュレーションを通して、心肺蘇生法トレーニングを麻酔科の協力の下、行っています。北原さんたちの活躍は、そのトレーニングや救急処置に関するベツトサイドラーニング（臨床実習）の成果が十分生かされたものといえます。

北原さんたちはこのように語ってくれています。「私たちは本当に良い経験ができたと思っています。実際の現場ではいかに評価・判断にとまどう場合が多いか、いかに普段から緊張感を持って、出来る限り多くの状況を想定して学んでいくべきかということがわかりました。」

今回の出来事は、医学部の実施している実践的教育カリキュラムを学んだ学生が、優れた医療の知識や技術を持っているだけでなく、高い倫理観をもち、責任をもって行動をできる人材として成長してきていることをまさに実証したともいえるでしょう。

### 本学医学部学生が愛・地球博で人命救助により感謝状

本学医学部学生が、愛・地球博で人命救助に貢献したことで、平成17年8月29日（月）に、（財）2005年日本国際博覧会協会から本学医学部学生に感謝状が贈られました。

（財）2005年日本国際博覧会協会発表内容



6月1日午前9時13分頃、トヨタグループ館の待ち列で、観客(41歳 男性)が倒れた。パビリオン係員がこれを発見し、協会警備隊に連絡し、救急要請を行った。患者は意識を失い、一時心肺停止の状態となったが、協会警備隊員がAEDを搬送し、居合わせた観客4名(横浜市立大学医学生)が連携してAED(全自動体外式除細動器)を使用した。到着した救急隊員並びに救急医及び救急救命士に引き継がれ、心拍が再開し、自発呼吸が戻った。その後、ドクターヘリで到着した 医師が救急車に同乗し、午前9時40分、救急車にて会場外病院に搬送された。この救急事案に対し、的確な応急処置を講じ人命救助に大きく貢献した功績に伴い、(財)2005年日本国際博覧会協会は、観客4名(横浜市立大学医学生)に感謝状を 贈呈する。



# 救われた命

## 徳島のAED事例から

「二〇〇五年、徳島県内の高校で生徒二人が相次いで倒れたが、AED(自動体外式除細動器)による「生命のリレー」で守られた。そして今、二人の両親は、ある思いを込めて取材に応じてくれた。

「もっとAEDが設置されてほしい」「昔にAEDを知ってもらいたい」「私たちが人を助けられるようにしてほしい」と。救える命を救うために何ができるのか、何をすべきなのか、高校での奇跡のともいえるケースは強いメッセージを発信している。

(政治部・門田 聡)

▲上▲

闘病生活を母は一冊のノートに書き記している。両親は、倒れた日の午後七時九分に病院に到着していた。救急処置室にいた子供は酸素マスクを口に当てていた。同二十五分、医師が両親に気管にチューブを入れて気道を確保する気管挿管の許可をもらいにきた。「キ

ルの練習をしていた。午後六時四十分すぎ、リバウンドボールを撮ろうとジャンプし、そのままだまに倒れた。体育館に居合わせながら、同僚の学校の教員二人が駆け寄り、すぐに心臓マッサージと人工呼吸を始めた。二人は救生(そせい)法を習得していた。教員間は騒いだらどうか。ボールが当たる衝撃などによって誰にでも心

が戻っても、親の顔が涙別でできるかどうかは分かりませんでした。両親は、医師の言葉が全ても冷静に聞きました。倒れたから十三日たった。同月〇日、子供は意識を回復。家族が誰れでも心をなで下ろした。精密検査の結果、心臓に異常はなかった。異常がなくても、胸にボールが当たる衝撃などによって誰にでも心

## 悲劇をなくして

# 母、メールに思い託す

なかつた。

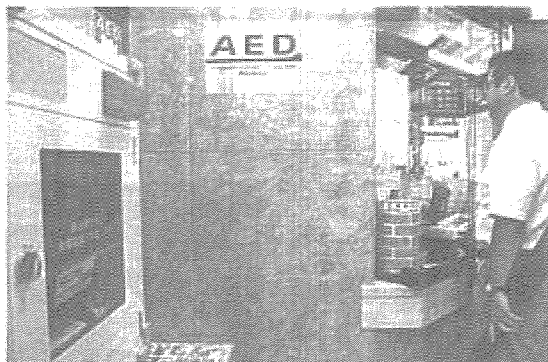
二〇〇五年〇月〇日

「〇〇年七月七日、自宅の電話が鳴った。夕食を食えようとしていたところだった。電話機からは子供が通う高校の担任教師の声がかかった。『子供さんが病室に運ばれました。緊急救救があります。』子供が倒れてからの活動でバスケットボールの練習をしていた。が戻っても、親の顔が涙別でできるかどうかは分かりませんでした。両親は、医師の言葉が全ても冷静に聞きました。倒れたから十三日たった。同月〇日、子供は意識を回復。家族が誰れでも心をなで下ろした。精密検査の結果、心臓に異常はなかった。異常がなくても、胸にボールが当たる衝撃などによって誰にでも心

カンシウカン?」「シンシウサイドウ(心室細動)?」。聞き慣れない言葉が、いくつも頭の中をめぐっていた。「何でもない。だから子供を助けて」母は思った。

学校で倒れた高校生のこの日、体育館で部活動でバスケットボールの練習をしていた。が戻っても、親の顔が涙別でできるかどうかは分かりませんでした。両親は、医師の言葉が全ても冷静に聞きました。倒れたから十三日たった。同月〇日、子供は意識を回復。家族が誰れでも心をなで下ろした。精密検査の結果、心臓に異常はなかった。異常がなくても、胸にボールが当たる衝撃などによって誰にでも心

## 機器の普及 文科相に訴え



徳島駅の切符売り場に設置されたAED(徳島市内)

「あのとさ、倒れた子供に駆け寄り、人工呼吸と心臓マッサージをしてくださった先生が、いなかっただら、救急隊の到着がもう少し遅かったら、除細動器を持っていなかったら、命を落とす者が、頭から離れることのない思いを長文のメールにつづらした。





事例14) 2006年9月 都営三田線 千石駅

- ①傷病者：70歳代女性
- ②心肺停止の場所：改札口付近
- ③バイスタンダー：駅員

東京都 報道発表資料 [2006年9月掲載]

## 三田線千石駅でのAEDの使用について

～都営地下鉄では、2例目～

平成18年9月11日 交通局

東京都交通局ではこのたび、職員のAED(自動体外式除細動器)使用による救助の事例が発生しましたので、お知らせします。

### ○内容

平成18年9月10日(日)午前10時30分ごろ、都営地下鉄三田線千石駅改札口付近で70歳位の女性のお客様が倒れていた。助役は意識の確認のため、お客様に声をかけたが、反応がなく、呼吸・脈とも感じられない状態であった。ただちに119番通報をし、AEDを使用するとともに心臓マッサージ及び人工呼吸を実施した。その後救急隊により日本医科大学救急救命センターに搬送され、一命を取り留めた模様。

### ○AED使用駅

都営三田線千石駅

(文京区千石1-29-13 電話 03-3945-2532)

### ○状況

10時30分 連絡を受け現場へ急行

10時35分 意識確認、119番通報、AEDを用意

10時40分

AEDを使用、電気ショックを一回与える

心臓蘇生術を実施する

10時45分

脈拍・呼吸の回復を確認

小石川救急隊到着

10時55分 日本医科大学救急救命センターに搬送

### ○その他

関係助役は、平成18年1月に上級救命講習を受講し、5月には、職場でAEDの操作講習を受講している。

事例15) 2006年 9月 さいたま市内運動公園

- ①傷病者：26歳男性
- ②心肺停止の場所：サッカーの試合開始直後
- ③バイスタンダー：医師（チームメイト）、他のチームメイト

2006年9月30日(土)

## AEDが救った命、未来 結婚式控えた川口の男性 4日前設置の幸運

さいたま市が今年四月から学校や公共施設などに順次整備を進めている「自動体外式除細動器(AED)」で、初めての救命事例があった。一命を取り留めたのは、川口市在住の会社員男性(26)。来月に結婚式を控えた幸せ絶頂の中、事故は婚約者の目の前で起きた。

男性は二十四日午後三時十分ごろ、同市桜区の荒川総合運動公園グラウンドで、サッカーの試合中、前半開始直後に突然倒れた。応援に来ていた婚約者の呼び掛けにも反応がなく、チームメートの慶応義塾大学病院放射線科の山田祥岳医師(29)が診たところ、心肺停止で意識不明の状態。すぐに人工呼吸と心臓マッサージを始めたが、みるみるうちに体は青ざめ、瞳孔も開き、同医師は「もう駄目だと思った」と振り返る。



男性の輝く未来をつなぎ留めた、AED（自動体外式除細動器）と同じ機種が設置された、さいたま市南区役所＝同区役所正面玄関

「近くにAEDはないか」。山田医師の問い掛けに、仲間が五百メートルほど離れた公園事務所に走ると、そこには四日前に設置されたばかりのAEDが。男性の体に装着するとすぐさま自動で電気ショックが与えられ、呼吸と脈拍が戻ったという。救急車は通報から約五分後の午後三時十八分に到着したが、この間の適切な処置が男性の人生を大きく左右した。

男性はその日のうちに意識を回復。現在も集中治療室で治療を受けているが、脳などへの後遺症も心配はなく、通常通りの食事や会話、自力歩行も可能という。「心室細動には電気ショックが必要だが時間の勝負。搬送後では間に合わないケースも多い。まさかAEDがあるとは思わなかったのが驚いたが、彼には幸運だった」と山田医師。

男性の母親(53)は「生来健康に問題のなかった子。入院先の医師から『AEDがなかったら助からなかった』と聞いてぞっとした。整備されたばかりだったと聞いて、本当に運が強い子だと思った」と胸をなで下ろす。男性は来週にも不整脈の治療を受け、経過が順調なら来月、予定通りに式を挙げるという。「息子の事故以来、外出先でAEDが目につくようになり、(婚約者の)彼女とも使い方の講習会に参加しようと話している」と語った。

さいたま市では来月一日までに、市内に三百九十七台の設置を完了する予定だ。



事例16) 2006年10月 中部国際空港

- ①傷病者：75歳男性（米国在住フィリピン人）
- ②心肺停止の場所：国際線乗り継ぎ保安検査場付近の通路
- ③バイスタンダー：空港警備員

## AEDで一命救う 中部空港で警備員



AEDを使った時の様子を振り返る高橋さん

中部国際空港(常滑市)の国際線到着ロビーで、心臓発作で倒れたアメリカ在住のフィリピン人男性(75)を、空港警備員がとっさの判断でAED(自動体外式除細動器)を使って応急手当てし、この男性が一命をとりとめていたことが、27日わかった。

お手柄の男性は、常滑市榎戸町、全日警中部支社勤務の高橋諭史さん(22)。24日午後6時ごろ、国際線乗り継ぎ保安検査場付近の通路で男性が倒れ、人だかりができてるところへ、巡回中の高橋さんが駆けつけた。男性はあおむけで口から泡をふき、間もなく心肺停止状態になった。

高橋さんはすぐ、近くにあったAEDを持ち出し、男性のTシャツをたくし上げて電極を設置し、2回電気ショックを与えた。30秒ほどして男性の自発呼吸が始まり、救急車で市内の病院に運ばれ、翌日に意識を回復した。男性は27日に退院し、帰国した。

高橋さんは昨年4月に採用され、AEDの研修を2回受けている。「実際に使うのは初めてだったが、とにかく急がなければと思った。実際に使うとは思ってもみなかった」と話した。

愛知医大高度救命救急センター長の野口宏教授は「ちゅうちょせずにAEDを使い、その後の連携も良かった。AEDは発症後5分以内に処置できるかどうかは救命の分かれ目。電気ショックを与えるには勇気がいるが、冷静に対処できた」とたたえた。同市消防本部は近く、同社に感謝状を贈る。

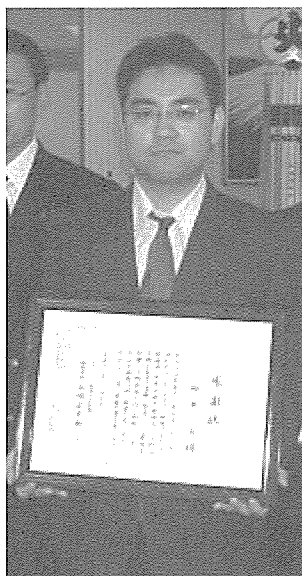
(2006年10月28日 読売新聞)

## 事例17) 2006年 10月 シティマラソン福岡

- ①傷病者：56歳男性
- ②心肺停止の場所：路上（レース中）
- ③バイスタンダー：医師（レース参加中）、警備を担当していた警察官、大会スタッフとして参加していた救急救命士

### 昨年の「シティマラソン福岡」で奇跡の救命プレー

---



福岡市から感謝状を受け取った田中さん（福岡市消防局提供）

昨年10月に開かれた昨年10月「シティマラソン福岡」（福岡市など主催）で、レース中の男性（56）が心筋梗塞（こうそく）で倒れ、出場していた内科医、警備を担当していた警察官、大会スタッフとして参加していた救急救命士の連携プレーにより、一命を取り留めた。福岡市消防局は「助かったのは奇跡に近い。3人の対応が素早かつ確だったおかげ。緊急時のお手本にしてほしい」としている。

大会は、同市中央区のヤフードームを発着点に、ハーフマラソンや5キロの部などがあり、計約6500人が参加した。

5キロの部に出場した内科医の田中茂さん（31）（北九州市八幡東区）が、折り返し点を過ぎた付近で、倒れている男性に気付いたのは、スタートして約10分後の午前9時ごろ。周りの人々から沿道に運ばれていた男性が、口をパクパクさせているのが分かった。「死戦期呼吸」と

いう心停止直後の状態で、実際に呼吸はなく、脈も止まっていた。田中さんが心臓マッサージを始めると、中央署交通2課の井本善之さん(45)が駆けつけ、持参していた人工呼吸用のマスクを使って息を吹き込んだ。さらに、救護スタッフとして参加していた早良消防署の救急救命士鬼木広明さん(45)が、AED(自動体外式除細動器)を使って電気ショックを与えると、間もなく心臓が動き始めた。9時8分、救急車が到着すると、男性は意識が戻り始め、無事、病院に搬送された。男性はその後の検査で、自覚症状のない心臓疾患が見つかったという。同市消防局によると、心臓停止から3分以内に、救命措置を行わなかった場合の生存率は50%で、7～8分間放置すれば、ゼロになる。救急車が現場に到着するまでの平均所要時間は6分前後だけに、現場での救命措置が、生死のカギを握っている。

同市消防局は「今回は心停止から約2分で適切な応急手当ができたからこそ回復できた。3人に応急手当の心得があり、それぞれの心構えがしっかりしていたことが大きい」と絶賛。田中さんが時間切れでレース失格となったことを知り、昨年11月、田中さんに感謝状を贈った。田中さんは「医師として当然のことはただけ。健康に自信がある人も、大会に参加するときは、事前に医師の診断を受けてほしい」、井本さんは「救命講習を受けたばかりで、まさか実践するとは思わなかった。助かって良かった」、鬼木さんは「AEDの使い方は簡単。消防で出前講習も行っているので受講してほしい」と話している。

(2007年 2月6日 読売新聞)

事例20) 2007年 1月 仙台市営地下鉄 長町南駅

- ①傷病者：40歳代男性
- ②心肺停止の場所：駅構内
- ③バイスタンダー：医師（居合わせた）、駅員

駅のAED、男性救命 仙台市

駅のAED、男性救命 仙台市地下鉄「備えてよかった」

1月29日14時35分配信 河北新報

仙台市地下鉄の駅構内で今年9日、40代男性が心肺停止状態となり、居合わせた仙台市の男性医師が（56）が、自動体外式除細動器（AED）を利用して男性の命を救った。仙台市内の公共施設に設置されているAEDを使って生命の危機を免れた初めてのケース。関係者は緊急事態への備えの大切さをかみしめている。

男性は9日午前8時ごろ、太白区の市地下鉄長町南駅構内の券売機の前で突然倒れた。偶然、改札口を出た医師が駆け寄り、男性に心臓マッサージと人工呼吸を行った。

駅員は駅務員室に置いてあるAEDを持ち出し、医師の指導で男性に取り付けた。直後に駆けつけた救急隊がAEDを使用し、一度の電気ショックで心拍が回復した。

医師は「土気色だった顔に、赤みが戻った」と振り返る。男性は市内の病院に搬送され入院したが、後遺症もなく、順調に回復しているという。

医師は「男性が倒れたときに確認したら、脈も呼吸もなかった。突発的な心肺停止にAEDがこれほど役立つとは思っていなかった」と患者の回復を喜び、AEDの有効性を実感している。

男性が搬送された病院は「医師の素早い対応が、蘇生（そせい）の確率を高めた」とみている。

市は2005年、地下鉄や学校など公共施設へのAED導入を始め、これまでに計165カ所に設置された。市内では05年10月に青葉区のスポーツクラブでAEDを使って命を救ったケースがある。

市消防局救急課は「これを機にAEDへの理解が広まり、公共施設だけでなく、民間でも設置する動きが広がることを期待したい」と話している。